

九品寺



九品寺



覚行法親王御陵墓

九品寺「くほんじ」は弘仁元年（810）弘法大師の開基と伝えられ、白河天皇は承暦3年（1079）5月27日皇后の安産を祈って、九品寺の住僧に加持祈祷をさせたところ、皇子が誕生した。そこで阿弥陀堂、五重塔・鐘楼など七堂伽藍を建立されたという。白河天皇は第三皇子覚行法親王を九品寺に入山させ、中興したという。白河天皇は1095年に出家して法王となり、院政をしき、1129年に崩御されたという。そして、覚行法親王は二世門跡として九品寺の中興につくされたという。覚行法親王は御室仁和寺の法親王門跡でもあったが、長治2年（1105）11月18日崩御され、九品寺に祀られたという。中世のころは堂舎僧坊も多くあったが、永正年間の黒田城の森氏と穴人城の小畠氏の争いで焼け、本堂と仁王門だけが残っている。

雷除ケ石



雷除ケ石

本堂（観音堂）の横に雷除ケ石がある。雷除けの祈願が行われ、靈験あらたかな雷神であるという。戦後九品寺が荒廃していたとき、船阪と大西に同時に落雷があり、九品寺をお祭りしなくなったから雷神の天罰だといわれたほどでした。一時期、九品寺は荒廃していましたが、現住職芝氏の手によってかなり整備され、昔の行事を復興されるなど昔の面影を取り戻しつつあります。九品寺へは国道9号線を河原町で左折し、船阪で左折すると赤い仁王門が見えてきます。京都交通バスでは園部駅西口から八田経由亀岡行きに乗車し、九品寺前で下車して下さい。なお、九品寺と摩気神社の関係は摩気神社の神宮寺が胎金寺という真言宗の寺であり、胎金寺は九品寺の末寺であったことから生じました。

摩気神社



摩気神社鳥居

摩気神社はJR園部駅東口からJR西日本バスに乗車し、摩気神社前で下車し、徒歩で350mほどのところにある神社で社が北向きというめずらしい神社です。創建は弥徳天皇神護景雲4年（770）といわれ、式内社名神大社に比定される古い神社です。祭神は「おおみけつひこのかみ」で「あまのこやねのみこと」の子で別名を「あまのおしくもねのみこと」といいます。「ににぎのみこと」が天下りされたとき、「あまのこやねのみこと」は「あまのおしくもねのみこと」に「皇孫のみけの水には天津水をささげ」といわれ、歴代の天皇の即位の大嘗祭には天津水をささげるようになったといえます。それ以来、「あまのおしくもねのみこと」を「おおみけつひこのかみ」というようになったといえます。摩気「まけ」は「みけ」のことで「みけ神社」が「摩気神社」となったといえます。「みけ」とは神にささげる食物の意味であります。江戸時代には園部藩主代々の祈願所となり、歴代藩主の参拝も多く、社前約300m手前にかかる橋（摩気橋）で下馬したとされ、この橋を別名馬橋ともいいます。摩気神社は摩気郷の総氏神とされ、鎮座地の摩気村を中心に篠田村、上新江村、下新江村（蛭子神社）、半田村（大森神社）、穴人村（菅原神社）、大坪村（八幡宮）、西山村（八幡宮）、船阪村（八幡宮）、下横田村（若宮



神社)、上横田村(三輪神社)、黒田村(熊野神社)、大村(城南町)(加茂神社)、北八田村(丹波町笹尾・中畑・辻)(葛城神社)などの集落でした。摩気神社にはこれらの村の神社が末社として祀られています。地図上で見ると篠山街道沿いにこれらの集落が点在しています。秋の祭礼である神幸祭はこれらの集落から参加して行われてきました。園部町合併以前の摩気村だけでなく、その他の地域の神社まで祀られているということからも祭域圏の広さがうかがえます。

摩気神社は真言宗九品寺の鎮守でもありました。九品寺の末寺胎金寺が神宮寺として、胎金寺の社僧によって祀られてきました。摩気神社の祭礼は春の田植祭(6月5日)旧暦では5月5日に行われ、秋の祭礼は「神幸祭」といい、10月14日15日にかけて行われています。摩気神社と関わりのあった村について簡単に述べる



と、摩気神社が鎮座する摩気村は江戸時代は園部藩領で元禄郷帳によれば250石、天保郷帳では334石、家数40戸、人口166人、摩気村より下流に位置するのが篠田村で元禄13年の丹波国郷帳では43石、天保郷帳では79石、家数12戸、人口52人、園部川の上流に位置するのが上新江村で元禄郷帳では178石、天保郷帳では328石、家数41戸、人口191人であったという。郷帳には上新江村と記載されているが、上流の集落を今井村、下流の集落を辻田村ともいう。上新江村という村称は近世以降の呼び方といわれている。明治9年に篠田村、摩気村、上新江村が合併して竹井村となった。篠田村の下流にあるのが下新江村で室町時代は北野社領船井荘の一部であった。江戸時代は園部藩領で元禄13年の丹波国郷帳では300石、天保郷帳では377石であった。下新江村の隣が船坂村で室町時代は船井荘の一部であった。船坂村は南に大坪、西山村北に中山峠を越えて、北八田村、東に黒田村と接していた。江戸時代は園部藩領で元禄13年の丹波国郷帳では石高は289石、天保郷帳では423石となっている。元禄のころに比べると石高は5割増となっている。これは園部川と本梅川の合流域の改修が進んだためといわれている。本梅川は九品寺付近から東向きに向きを変え、九品寺の向かい側の山の手前で折れ曲がり、南向きに流れ、園部川と合流していたと思われる。明治以後に改修が行われ、現在のような流れになった。河川跡が水田となり、通称「新田」と呼ばれる地名がある。船坂村の南にあるのが大坪村、西山村で本梅川東岸が大坪村で石高は元禄13年の丹波





国郷帳で154石、天保郷帳で214石、家数は29戸、人口110人、西山村は元禄郷帳で石高は154石、天保245石、家数27戸、人口137人、この2村は明治9年に合併して、大西村となった。大西村の南に位置するのが穴人村で室町時代は北野社領船井荘の一部江戸時代には園部藩領であった。石高は元禄郷帳では207石、天保郷帳では485石、家数は80戸、人口350となっている。半田村は明治9年に南半田村、東半田村、西半田村が合併して成立したもので、南半田村は亀山藩領、東西半田村は園部藩領であった。園部川の支流半田川の東岸にあるのが東半田村、西岸の上流部にあるのが南半田村、下流部にあるのが西半田村であった。以上の村々が旧摩気村における摩気神社と関わりのあった村であった。園部町と合併以前の摩気村はこれらの村以外に口司村、口人村があるがこれらの2村の神社は南大谷の藪田神社の末社であった。